

No.	大学名	プロジェクト名
	京都産業大学	kiton

参加学生 (登壇者★)	★氏 名 (小栗波琉 法学部) 4 回生 ・氏 名 (栗原奏 経営学部) 3 回生 ・氏 名 (岩田一輝 法学部) 4 回生 ・氏 名 (西川晃徳 法学部) 3 回生 ・氏 名 (谷後響 法学部) 4 回生	連携先からの ミッション	小型家電リサイクルを当たり前の生活習慣・文化として定着させるための施策を提案せよ
活動期間	2020.10.15 ~2021.1.14	受け入れ先 団体・企業名	リネットジャパングループ株式会社

ミッションへ取り組み概要（自由記述，図表・画像挿入可）

私たちは名古屋に本社を置く、リネットジャパンさんからテーマを提示していただきました。いただいたテーマは「小型家電リサイクルを当たり前の生活習慣・文化として定着させるための施策をかんがえよ」というもの。

リサイクルについては、私たちの中でも一定の知識とイメージはありましたが、それを文化にしていくなかはどういう意味なのか、ずいぶん悩みました。

授業では、よい話し合いを進めるための技法をレクチャーいただいていたのですが、いざプロジェクトを実際に進めるとなると、当初、発言やアイデアが特定の人間に集中したり、深掘りができなかったりと軌道に乗せるまでが大変でした。

既存のリサイクル事業もたくさんある中で、いったい私たち学生に何が提案できるのだろうか、ということについては不安を抱えたまま、とにかくまずは事業例を手分けして調べ、一人ずつアイデアをもちよって検討しあいながら、手探りで進んでいきました。

その中でたとえば、パソコン・携帯電話・ゲーム機などのリユース事業を目標にする等の、ある意味すでに存在している事業領域に取り組むようなアイディアも、当然、議題に上がりました。

しかし、班全体で協議を重ねる中で、それは本当に生活習慣・文化と呼べるものになるのか、はたして「当たり前」とまで言えるほど生活の中に根付くことができるのか、という点が疑問点となりました。

テーマの本質に戻り、刹那的なものではなく、真に普通に持続・継続できるものにしないと、いただいた命題に答えることにはならない、と考えたのです。

そこでそれらの案は見送り、徹頭徹尾、普及と定着にフォーカスした、なるべく身近でかつ手軽という要素を追求するという事で班もまとまり、結果、「身近で手軽」を実現していたエコキャップ運動の後継としての立ち位置を、プロジェクトの最終的な目標にすることを決めました。

リネットジャパンさんには、中間報告でも最終報告でも、幹部の方も含め三人の方からそれぞれ真摯にフィードバックをいただき、大変励みになりました。大変お忙しい中、伴走していただきましたこと、あつく御礼申し上げます。

ミッションに取り組む中で社会的課題として見えてきたこと（ミッションと深く関わる社会的な課題）

勿論、収益性と社会貢献要素を天秤にかけて考えていったのですが、やはりどうやっても企業ベースである以上は収益がなければ立ち行かないということで、収益性を取ると公益性が薄れ、またその反対も同様という二律背反的な苦悩がありました。社会的には皆が皆、声を大にしてSDGsがどうであるとか地球そのものに目を向けるべきであるとかを大義としている時代ではありますし、直近では脱炭素などはその筆頭ではないかと考えます。しかし、そもそもが、その究極的な目標が開発、もっと言うてしまえばビジネスの持続にあるという点で、その両天秤に対してのアプローチが、特に収益性に対して甘かったなという反省と気付きをえました。ビジネスの手法の中で良いことが続いていくためにも、そして私たちがこれから社会に出ていく上でも、そのバランスの取り方をさらに深く考える必要が見えてきました。